



第 14 号

1970.10

書

評

編集・発行
関西大学生協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人 高尾 進

吹田市千里山17
TEL 388-1121
内線 776

仮りの姿と真なる風景 との出会いへ

わたしの観た風景＝映画表現
篠田正浩

表現の〈美学〉形成について
川桐信彦

マルクス主義の再検討について
下程息

「思考の原理」の確立を
—人間疎外恐慌の展開期
カ石定一

わたしの研究ノートから
古代の謎に挑む Ⅲ
網干善教

書評／丸山松幸著「五・四運動」
はやしはじめ
巻頭言／文化についての断章

■ カット写真は「バンブー・ガール」(ジョン・ハスキンス作品)アサヒカメラ9月号より

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

A 「GNP神話」が崩壊し、人間の生存を脅かす「現代文明」への深部からの問い直しを惹き起している。これは、人間をとりまく物質的生活諸関係の盲目的な構造変化が、ヒズミとして露呈する一方、管理社会の成熟化にともなう文化の場^①の流動現象の事態である。

私達が生きている今日の存在状況を正当に、充分とらえる問題意識のもと、近代文化の超克、文化の奪還が焦眉の課題として、私達に提起されている。

B ①既存の文化・科学・学問の「世界」の「安定性」が質的にも崩壊している。資本の運動に伴った文化・科学・学問を支える諸制度の再編成過程での変化・解体・矛盾の現象化である。そこから、トータルな崩壊、再生としてつきつけられる。(「反権力」「没権力」だけでは、八文化^②形成に真に有効たりえない。リアリティの回復により新しい知的関連の方法が追究することだろう。)

②創造のエネルギーの対象化^③文化、沈黙する大衆が内的矛盾を文化領域で対象化する模索の実践を、支配層は文化を管理の対象にすえ、自立性を形骸化し、既存の文化領域を前提として政治的に固定化、制度化の方向にある。被支配層の既存の価値の止揚へ変革のバトスとして外化する文化の形成^④大衆の自己解放化が、独占資本の管理社会、情報化の成熟化と相克的な事態を惹き起こさざるをえない。

③資本との関係では、管理通貨制度を統合の軸とした権力による労働(生産)、販売過程に直接介入し、私生活をも管理している。文化・遊び・性のレジャー化が機能し、支配の一部として合理的な管理・組織化の槓杆と化している。このように日常性の内部世界でさへ、政治支配の八統合と分断^⑤が貫徹されている。真しく、生活の腐蝕作用が内・外部的に危機として進行している。ここで、マスメディアが支配の統合的イデオロギーの浸透の全面的な展開の機能を果たす機械装置として、位置付けられその機能を果している。

管理社会、情報化の方向性は、全電通、電気通信政策委員会の「情報化問題と電気通信政策に対する中間報告」によると次のように位置付けられている。①「通信回線の独占と投資力を背景に、昭和60年代を展望した長期計画をつくり、事業経営の中心を、データ通信サービスにより情報関連産業分野の進出において、発展成長をはかる」。②「巨大産業は現在公社独占となつている通信回線の開放、自由化」(資本の主導下、非民主的であり、非平等的であり恣意的である)。「情報提供、情報処理サービスの完備」(法制下の下に国民負担のもと、確立を目指している。)

③「産業はもろろん政治経済から国民生活を支配することが可能」「情報処理のための国家的規模のネットワークが完備すれば」「容易に軍事的利用を可能」にして「ことに軍事的利用は情報関連産業に新しいほう大な市場を提供する可能性をもつ」(全国民のナンバーゼーション(番号化)を可能にすることにみられるように、創造・思考の質を規制し、効率よく、合理的に統制・組織化された管理社会を目指している。

このように科学・技術が生産過程に組込まれ、合体されれば、労働過程の変質を惹き起こす。人間の労働が機械の

文化について断章

付属物へ転落し、疎外。非人間的。様相を深めざるをえない。

資本主義の最高のプロバガンダの映画に加えて、T・V、新聞のマスメディアの「豊富化」にみられ、このもとに置かれた大衆は、皮膚感覚の麻痺というより、無力感にとらわれざるをえない。「情報化」により意識の自律・選択・連関の形成の可能性の圧殺が行なわれ、無意識のうちに「強制」され、「自動化」「遠隔操作」される自己をそこに感じざるをえない。

管理社会、情報化は、①大衆社会の激しい流動性や革命・思想さえも風俗現象のなかに組込み、全ての人間の精神・行動の形成・価値を風化させている。②GNP意識の克服へ「世界第2位になったのだから文化の上でも世界の冠たる国民へ」というエコノミックアニマルから脱却、生きがいのある生活がさげばれている。それは権威への盲目的・迎合的なコピー文化、管理された生活様式をしいている。

現在、かかる冷感さと残忍さを伴った繁栄と安定^{II}弛緩と閉塞の文化状況である。精神的空間への展開を圧殺されているため、大衆は次第に欲求不満のようなものからくる焦躁感として癡癡している。この偏畸化は、現代の人間の内発的な「文化欲求」として「感性の解放の希求」として発生してきている。

C 大衆は、戦前は「人民の人権」を無視、奴隸的な抑圧された生活を自己の誇りとしていた。この錯倒は、天皇崇拜へとめられた。そこで連帯感を殆ど生理的感覚にまでに熟成していた。農民反乱など社会の基底での大衆の爆発的な解放感のエネルギーの奔流を、権力的に天皇へ結びついた民族エネルギーへ交流を回路された。資本の本源的蓄積から帝国主義の過程での大衆収奪のため生活の貧窮が極点に達し、民族エネルギーが、生活の圧迫が支配階級の政治によるという感覚・認識に達しえず、日本を包囲する外国の圧迫の結果によるとし、民族排外主義へと転化された。

この構造を支えた農民の生活環境は、地主を中心とした「祖先崇拜」の呪縛であった。そこでの日々の生活、労働が共同体の秩序によって貫かれていた。この共同体を天皇制^{III}家族國家^{IV}へ組込み、編成していく。そこで、この構造への批判を異端として迫害していくように、自己規律として、ひとりひとりを外から社会規制としてしめつけていく。ここでは^{III}思想^{IV}土着化の展開が充分しえなかった。

農村共同体と天皇との本質的に異なるものの屈折した結合^{II}日本資本主義の脆弱性を支えたのは中央集権政治・警察制度であった。「叛乱」という考えは、人民から遠いばかりでなく、人民はそれを怖れるものだ。それにもかかわらず、叛乱が不可避になるというのは支配者たちが人民をいら立たせて叛乱したままで押しやるからなのだ」と主張する中江兆民のことは、増大する過剰生産力と大衆反乱に迫り上げられ、次第に上部構造へと這いのぼっていく「時代」を表わしている。

まさに日本資本主義が沈黙の大衆に存立していた。ここでは、歴史を推進するエネルギー源の人民大衆は、人民こそ歴史・文化の創造者であるという認識に到達しえる^{III}入場^{IV}そのものの喪失であって、後進資本主義下の人民大衆の

無惨な宿命だった。

この日本社会の歴史的研究に関して、戦前は、日本資本主義をめぐる「講座派」と「労農派」の論争がなされた。他に、④M・ウェーバーの「類型論」から、大塚久雄、丸山真雄らの「共同体理論」⑤北一輝らの実像、虚像のナンショナリズム⑥柳田国男らの日常生活の伝統―農耕、祭、所有などの形象から大衆の生活、労働への心的、内的省察⑦吉本隆明の、「リアリズム」の止揚として入対幻想Vを軸とした入家V、入国家V省察の「共同幻想論」

⑧谷川雁、森崎和江、黒田喜夫らの、労働、生活の矛盾からの始源的エネルギーを軸としての労働と生活の場⑨平田清明、内田義彦らの「私的個人、私的所有者の契約的結合体」からの「共同体論」、その他、色川大吉、橋川文三ら他の独自位相からのアプローチがなされている。

ところで、昭和30年以降日本資本主義の存立基盤は転換していく。独占資本の「過剰資本化」の矛盾解決を体制の基盤部、農村の解体化という矛盾に落入している。支配形態を変換しなければならない。日本資本主義の支柱入天皇制Vの近代化入象徴Vの活用である。天皇との連帯感の祭事―「踏園神社」などの古い構造を新たな外被をまとい、独占資本の外被としての機能を再生産している。

帝國主義は資本の純粋化―社会の近代化過程ではありえない。大衆の意識の固定化に土着的、非合理的な虚飾へ結合させている。支配権力機構の末端組織の網羅は、郷党社会としての古い組織に代行され、権力の動向に敏感に先取りし、支えている。この意味で、入統合と分断Vの管理社会構造は、情報化、郷党社会の形態のものになされている。しかし、生活次元での生産力と生産関係の矛盾の爆発は、この構造そのものの転換をせまっていく。

D 既存の社会状況が「自然発生的な社会的分業」のうえに編成されてきた。この社会から、生産と流通を合理的に効率よく管理、組織化する管理社会への転換過程である。この産業合理主義のもつ控柄から人間主義的疎外論が登場している。それは、機械そのものが呪縛力をあたかもつかのように物神化してしまう錯倒したものだといえるだろう。

資本主義の文明、文化の死の刻印の状況を克服しえるかが、文化の奪還―形成の旨為として問われている。このように外的な闘争は内的闘争と結びついている。人間の入労働V入生活Vの分裂を止揚した主体的な能力を豊かに発揮しえること。私達の存立―資本の生産関係の矛盾、対象化しきることだろう。



わたしの観た風景＝映画表現

篠田正浩 (映画監督)

仮りの姿と真なる風景との出会い

私にとって、映画を作るとは、一番最初
△風景▽を見ることがあった。△風景▽とは、
一体何か。△この風景▽に対して△その風景▽
の中に身を置いている人は、ひとつの政治現実
でつくりあげていく△風景▽がある。

ところが私にとって、カメラで△風景▽を写
しとる、人間をも△風景▽という基盤の中に入
れてしまえばすべて△風景▽であって、カメラ
に写るものがあるのままだと信じていた時
期もあった。ところが私にとって△風景▽とい
うものは、明らかに切りとって写してくるもの
である以上、私の、イデーによってしか△風
景▽が手に入らない。この単純なことが最近や
つとわかりかけてきた。

自分の意思によって、切りとられるというこ
とが、それが時として、政治構造という一方
になるけれども、私にとって、あくまでもう
一度△風景▽を△風景論▽として、初源的な問題

にまで、返らざるを得ない気持ちだが、今とつて
も突き当たっている。

それは例えば芭蕉の俳句とか、万葉時代の人
が歌った△風景▽は、明らかに、人間が栽培し
なかった△風景▽である。それは人間が初源的
にこの地表と出会った△風景▽の中で自分たち
が存在した、そこに大きな覺(いらか)を建て
て、官殿を建て、平城京をつくらせていく、とい
うプロセスに、△政治▽のあとを見ることがで
きる。△現実▽がわれわれの△歴史▽として語
られていた。だからわれわれは、△風景▽を見
るということによって△歴史▽を見ることがで
きたと言えるのではないか。それでもなお、私
の△内なる風景▽は、△とらえられた風景▽に
対して、仮説が立てられたり、解説がされた
り、そしてそれに自分のイデーを組み込んでみ
て、再編成してみたとしても、なお、そこに
は、まだわれわれにとつての人間の△風景▽

は、つゆぞつかまつたというふうには私は思っていない。

それはちょうど古代人が初めて武器―道具を手にして△労働▽して、大きな木を切った。その木を切った時に、彼は自分の休息のために椅子に腰をかけた。その時点から、人類は初めて△腰かける▽という概念を発見した。その概念をして発展させていく。人間はとうとう、いす、という形を手に入れる。そして、これは何世紀にもわたって、われわれが現在腰かけている。いす。に腰かけている、私にとってどうも△芸術▽ないしは△風景▽とは、いす、の形によって代表される一つの混沌をどうしても思わずにはいられない。そのいす、のホルムとというのは明らかに現在書かれている。いす。は、現在の世紀を代表するものであるし、その現在の世紀はかつての世紀を全部積み上げてつなげたと思う。そうすると、芭蕉や古代人が描写した△風景▽は、栽培されなかつた△風景▽、いわば文明が手に触れてなかつた△風景▽について、彼は自分の世界いわば栽培された世界から栽培されていない世界を旨としたに違いない。そこにわれわれの人間としての感動の初源的な発見があつたのではないか。

それはどうも、私の、政治的な季節である現在についても、ぼくは同じ姿勢が、いま私にとって大きな問題としてあるのではないか。ちょうど古代人が初めて、いす、を発見したという

ように。卑弥呼がすわつた。いす、というの私にとって、たとえば大きな意味を持つ。日本にとつて△天皇制▽が起きていた。それは、現在の形で成立してしまつていてプロセスの中でどんなに天皇陛下の御来光を記録しようと美智子妃殿下の表情を一つとらようと、そういうのを雑誌で見ながらも、われわれにとつていつの間にか、こういう宿命をしい込んでしまつていられるわれわれの文明という大きないす、、そのいす、ができればもつとも初源的な道具をふるって、われわれが結局は、そういういす、に腰かけねばならなかつた。そういう人間の総和というものがわれわれの△風景▽ではないかと思う。

それは、われわれの△内なる風景▽は極めて初源的な最もプリミティブな形の△風景▽の発見であらなければならぬと思う。のに決して、そういう△風景▽は手にすることができない。例えばわれわれの庭に咲くチューリップの花は、このチューリップの花の最初の種は、一体どこにあるのか、もう失われてしまつて以上、われわれはまるでSFの世界にいるように暮らしているのではないか。こうなつてくると、私にとって現在の政治状況は、すべてSFで、それは△過去▽でしかない。この△過去▽を乗り越えるということ、いわば人間の一番初動の情念といふか、得体の知れない情念に、触れていかなければならない。そうでない

限り、われわれの、私の△内なる風景▽は手に入らない。それは一体何なのか。

私は、むしろ△反政治▽というような意味さえ持つのではないかと思う。政治そのものもつ、われわれの△政治行為▽は、もう一つのいす、を用意することになつてしまつて、いす、に腰かける、最初にいす、を手入れたときの感動とはほど遠いものであることは、もはや、もう間違いない△現実▽として、私たちにはある。

すると、私の実存というのは、われわれのあらゆる想像力を駆使して、最も学究的な言い方をすれば、最も学究的にわれわれの初源に、さかのぼらねばならない。それは、ほとんど無明の世界になつてしまつていて暗黒、いわばキリストがこの人を許せと言つたり、釈迦がすべての、その聖者は絶無とすと言つたあれより、もつと先にある。われわれの暗黒というものが、われわれが、私がいま、大変よみがえつてくる。だから、われわれの暗黒は、いわば一つの支配原理と非支配原理という現実を手にする前の、あの混沌に身を置かない限りわれわれのあの△風景▽は見当たらぬ。△現実▽の形は、私にとって、すべて△過去▽でしかない。この仮りの姿とわれわれの△真なる風景▽との出会いこそ、私の映像の完結するときではないかと思う。

＜表現の美学＞形成について

人間は表現する存在

川 桐 信 彦

—「表現の美学」の概要について、まずお聞かせ下さい。

『脱獄の美学』以降日本人の表現性・表現力の問題についての考察です。『脱獄の美学』と『表現の美学』の二つの論文の母体は、「勃起の思想」です。

「勃起の思想」は、要するに思想が生理的な勃起現象と非常に共通点がある。思想は、非常に独創的な非常にエネルギーッシュで生理的に非常に快的なものである。そういうところから新しい思想が自分なりに身近なものとして出てくる。それが非常に主体的な表存を支える一つの契機になるわけです。そういうところから、日本人の表現力の乏しさを日ごろ痛感していたもので、それをもっと強くアピールする必要があると考えた。具体的に、例えば、ぼくらはテレビでアナウンサーを見る。そうするとアナウンサーの表情の愚劣さ、いろんな表現力の稚拙さ、それは目ざわりなことだ。一般の民衆もその日常性の中で、非常に表現力が乏しい。表現力が豊かであり、表現力に富むということは、即ち、人間性を回復するとか人間性を豊かにするとか人間を奪回する要求に合致する一つの眼目だと考えたわけです。

「勃起の思想」は、思想がもつと自己にとって非常に密接な主体的なもので、いうことを強調したいわけです。何

か人間の行動を起こすには、その根底にまず思想があって、そこから表現力を媒介として、具体的な表現としてあらわれ。ですからその『表現の美学』の中で取り上げた問題は、例えば「政治的表現」或いは「都市の表現」あるいは「日常性における表現力を奪回せよ」ということである。それで普通、政治は非常に人間性が遊離した一つの高邁な思想があって、遙か高いところにある一つの理念のために民衆が結集すると考えられがちだ。けれども、政治にしろ都市にしろ、人間の表現の一つの現われである。人間は非常に多方面に表現する存在であるから、人間の表現であるということを認識しないところに逆に政治や都市が人間を圧迫してくる。そういうところを問題にしている。

もう一つは、「日常の表現力」の奪回とは、例えば、天井さじきの寺山修司氏はアンニュイとか、日常性を奪回するために、われわれは劇的なドラマをつくらなければならない。それを非常に生活化しなければいけない。あるいは、観客と演ずる側とは一体である。という発想からいろいろやっている。けれどもそれに私は非常に共感するわけです。例えば△ことば△文字△演技△がどうも日本人は、俳優、職業的演劇人にとって△演技△表現△は問題であるが、われわれに無関係なものというふうに考

えられがちである。

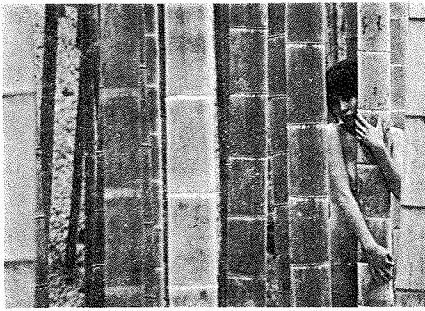
しかし、人間として存在する以上、表現力を持つということ自体が、一つの人間性を豊かにすることか、人間性を高める。とか、人間性を回復。することになる。

つまり、人間は表現する実存であることによつて初めて人間として完成するというのが私の考えです。

—「日常の表現力」の奪回が普段に運動する時に初めて、いまある政治を超えることができる。それがないがゆえに、いまの、ある意味じゃつまらない政治も超えることができる。できないんだ、と思うわけです。けれど、そういう意味で、一般にいわれる政治主義に対して批判的に「美学」の位相からとらえかえした意見を次にお聞かせたい。

△表現△は、根底的に思想がある。日本の政治家が、哲学や思想がないと言われることは、要するに表現がないということの現われになっている。日本の政治家は非常に型どおりの演説とか、非常に内容の空疎な演説の内容と、非常に、思想と表現力のなさを如実にしている。

人間が全体的に表現力のレベルアップをすることによって、さまざまのところ



で実行性を持つてくるわけですが。例えば、現実の体制或いは既に価値とされているものに、価値変革を遂行することは、表現力とか表現性に富むことによつて初めて達成される。それをひとつの概念として、いくらぶつあけあつても何も生じない。例えば、全学連や全共闘の連中が火炎ビンを投げたりすり込んだりということも一つの「表現力」だけれども、しかし、ほんとうに影響力をあらわして自分たちの理想を実現するには、もつと巧妙で緻密な表現力を考えていかなければいけない。そこには演出も必要だ。元来演出であるとか、演技であるとかいう「表現力」に対して、どうも日本人の感覚は「うそだ」、虚構ではないか。というところがある。しかし、真実をより真実としてアピールするのは「技術の問題」があると思う。

また、思想にしても「マルクスの思想」であるとか「レーニンの思想」であるということをや唯一絶対にするることによつてそれに追従することが何か自分の活動の源泉であるように思う。けれども、本来、自分が主体的に行動するには、やはり自分なりの本来の思想がなければいけない。自分の本来の思想に立脚した「表現力」のあらわれとして、すべての活動が開始する。ですから人間が人間であるのは何かということをはやりの方面でいわれるけれども、ぼくはやはり

人間は表現する存在、というふうに見える。ですから文化が発生するし、そこに非常に思想やさまざまな芸術や産業が発生する。それはすべて人間が表現する存在であることを、自ら立証しているわけですが。

——去年が要するに「政治の時代」で政治以外も、政治のことをはつきりと政治権力を奪取しない限りなんにもならない。すべて、政治に従服する型がでて、例えばいいだも氏は、いまは「政治の時代」だ、政治をやるんだという型で極左へ行く。ところが「時代」が終わると、一応後退した形で、右へ行くといった左右往復運動ではない。

「政治」は何かということが本当に理解されていないと思う。また、大学で旧来の秩序と機能が崩壊して、崩壊していつて、学生は、講議はななくずし的にポイントする。

また上からの当局であるとか、教授会の説明会あるいは、あの討論会というものは拒否していくと、いっくけれど、そしたら、自分たちがたとえば自然発生の爛熟というものを見られないと要するにぶらぶらしているだけだと、いう状況が

あるわけです。そういういわば自然発生の爛熟というものを一体どのようにしてこしらえようとしているのか、またそれをこしらえさすことができるのかどうかという問題についてどうですか。

政治権力を奪取しない限り、理想的な成長は実現しないとか、あるいは大学が封鎖されることによつて大学の機能が停止する、そこからは何も生まれえない、何もすることができないというところ自体がすでに日本における表現力のなさ、表現性を喪失していることを暴露している。つまり思想は、元来その人間がいまいきと生きるためにある根拠です。だから、ある特定の思想に追従するとか、ある考え方を神格化させて追従することは思想ではないし、まして、大学で非常に観念論的の一つの思惟をもて遊ぶことをもつて、善」とする学問のあり方の弱さがそこで暴露されている。学問でも思想でも、元来、人間がいまいきと生き、行動する、アクションの連続のために学問も思想もある。そういうところが非常に誤解されているために悪い意味の観念論、事大主義、形式主義がはびこっている。

だからこそ、表現性を獲得する。表現性を高める。ことが最も、いまの日本の現状に即した問題意識だとこう考え

るわけでは。

ですから例えば政治は元來人間が生活を営む上、集団で営む上の、いろいろなさまざまな具体的な非常にリアルな問題を処理したり、非常に日常的な欲求を充足させるためである。しかしながらやはり一つの国家が全体として進む、全体として存続する上の理念みたいなもの、あるいは思想みたいなもの、あるいは哲理性みたいなものが、当然その根本にはななければならない。日本の政治が思想性がないんだ。思想がないから、表現力がないし、まして政治家たちの演説にしても演説の内容にしても、非常に稚拙なわけである。ですから、その△思想▽と△表現性▽の二つの面を踏まえてもって非常に必要があると思う。

あの表現の美学に書かれたことが大切だと思うのは、形骸化したことばなんだけれども、いわば徹底した民主主義ということが、一番重要なフアクターだと思う。一般的な政治危機機体へ政治が解決されない限り、何にもならないということはある意味ではフアシズムの軍部だっている、という意味で、あの頃は本当に主体的なもの、つまり表現の先決にして思想があると、志気があると、その前として存在があるというものを徹底的にやらない限り、権力奪取するのは一体誰かということ。要するに主体がない。同じ

ような繰り返ししかない。いわばあの意味では権力奪取しない限り決定的にならない。しかし、それに至る過程において、いわば社会の内実、内実をつかっていくのは自分たちだと、ある意味では現在のな次元でいけば徹底化ということが必要ということが、一般的にもっともっと確認されなければならない。

「政治の問題」でも「デモクラシーの問題」でも、要するに人間が個々に大きく大成するという事です。個別的に大きく大成しないから人間の尊厳も棄損される。ましてや、人間性の回復」ということが非常に空論に終わってしまう。つまり、個人その政治的対立であるとか、一つの主張の激突という現象は根本的な、自己の主体性、自己の自由ということのが侵害される時に生ずる。それを本当にとらえていかないと、何のための議論であり、何のための論争であり、何のための改革であるかということの視点がずり落ちる。何か自分を超えた別の理念のために、忠誠を尽くすというのは、もう天皇制とか、その他諸々の後進的な時代、歴史が証明している。だから、例えば、アメリカだつて非常に急進的な学生が、最近ではフォード、ゼネラルモーターズという大企業に対して「公害問題」をぶつけている。非常に具体的な日常性の中で、企業が利潤を追求することによってわれわれにとってはこういう面で疎

外されている。こういう面で非常に、マインスの面があるんだということを具体的に対置している。

そういうことも一つの方法だと思う。それに、表現力が豊かになる、ということが、すでに、人間が豊かに生きる、ということ。具体化する最も究極的な手段だと思う。そこに本当の自由が獲得される。そして一般にいへば「表現の自由」が果して侵害されている、ということ、むしろ「表現の自由」は、今日どう大きく許容されている時はない。そういう時に「表現の自由」ということにしろ「表現の表現力」のなさを陰蔽するために何か怪しげな極端なことを、表現する自由を奪われているというふうにすぐ取り違える。ですから、表現力の問題であると同時に、表現性の問題も、非常に重要だと思うのです。こういう問題を取り上げたというのはあまり前例がなかった。今日の時代に非常に必要とされている課題と思うのです。

—より表現するにはより具体化される条件がある。より具体化されるために絶えずやつぱり具体性のあるうへ進まなければならぬ。ところが一方では具体的な形であらわれてくるものが絶えず具体的な問題を提起するものが絶えず基本的



もの具体的に出すもののやはりいは根本的な原理的なところで規制する。それは一体何だろうか。

例えば公害である。いまさまざまな経済的な混乱においても政治的な混乱においても、いろんなところで規制してくるものがある。それに對して具体的なイメージを出して、具体的な幻想でやっぱり対置して、具体的な場合でも、政策でも何に對して根本的なところで規制していくのか、いや規制されるのか、というような問題について――

それは、例えば日大の問題で考えれば、日大というのは一般的には体育会とか、右翼の学生が羽織、袴で肩を怒らせているというイメージでとらえられてあまり、知的な大学ではないというイメージを一般的に抱かれていた。そういう日大体制に拮抗する学生があらわれたことによって日大の中にも考える学生がいるんだということを立証されてきた。それで当然日大は、そういう自由内の日大体制を持続するために、そういう学生を規制するという方向に出る。

ですから、そういう一つの△表現▽や△考え方▽を規制するのは必ず何らかの体制を持続させるために必要だという判断のもとに規制が行なわれる。だから、そういう規制が平然として行なわれてしまおうという感覚そのものが、人間の中心

全体的な△表現力▽△表現性▽ひいては人格とか人間性というもののが非常に軽んじられているということのあらわれといえる。人間性の奪回とか、人間性の尊厳とかはやはり△表現力▽△表現性▽を通して初めて、この自分以外の関係は△表現力▽を媒介に成立する。また△表現力▽△表現性▽を媒介に對する△価値▽△変革▽△転換▽というようなこともい

われるけれども、それは自分なりの新しい思想。新しい独自の考え方。新しい表現力を持つことによつてはじめて達成されるといえる。文学でいえば夏目漱石、芥川龍之介、太宰治、川端康成という一つの既成の文学の価値の基準がある。それに対して、確かに読むという上では一つの△美▽を発見したりすることが出来る。けれども、どこかやはり△文学▽とは、はたしてどうなのか、どうも自分の感覚の中の△文学▽とは違う、未成熟な認識が一つのきっかけとなつて、自分なりの△表現▽、自分なりの文学感というものをもそとで育てていくわけである。それが主體的な表現力の奪回であるといえる。美術だってその他の種々の思想だつて、芸術でも自分なりの感受性、自分なりの発想、自分なりの問題意識というものを統合して、自分なりの主體的な△表現力▽ということによつて、そこに一つの対立的なものを、あるいは新しい創造的なものを生み出すこと

によつて、自分の△表現性▽が解放されるわけである。ですから、そういうところを、みんなが認識していかなければならない。思想の問題も、例えばマルクスやレーニンに追従することよりもマルクスやレーニンを止揚することのほうが思想を豊かにするのではないか。

――そうすると「表現の美学」のあと具体的な作業の構想としてはどういうものか。

大体△思想▽は自分が真にいきいきと生きられるための考え方になる土台になる。ですから例えば文章を書いて、それで終わりとするんじゃないやなくて、やはりほんのりのその創造的な、展開の一つの契機にしたいわけです。ですからこれを契機に、いろんな文章がどんどん出てくる、そこで言っているものを自分が実践するための文章も出てくるし、たとえば「必殺の思想」「ダリエの公開状」という一つのまた別のテーマでの構想が出てきていて、それから非常に「表現の美学」でいっているような主體的な創造性、主體的な感覚、主體的な表現性を豊かに拡大するといったためには、映画、映画芸術、という、視覚芸術に對しても野心を持っている。ですから著作と、自分の創造活動というか、常に分離しないで一つの全体的な表現、創造、活動の母体となつていくわけです。

マルクス主義の再検討について

下 程 息 (文学部助教)

学園紛争はわれわれ大学人にとって大きな痛みであった。紛争によって提起された問題は、戦後の大学教育の在り方、われわれの在り方に対する根本的な反省と省察を迫るものであった。それは七十年代を如何にして生きぬくかという、歴史的・実践的な意味における人間学的な問いにつながるものであった。学園紛争はまだ終つてはいない、問題はむしろ今後にあるといわねばならぬ。ならん理論的根拠もなく、反体制的、体制批判的人間はけしからん、追いだせばよいという、感情的反感のみに左右されたまま、セメント化した従来の管理体制の擁護に汲々としていることは、基本の問題の回避にはからぬ。ここに、われわれは許し

がたい精神の衰弱と沮喪をみるのである。かかる保守反動的な態度は、かえつて紛争の傷口を大きくするばかりではなからうか。

言論と表現の自由、世界観の多様性こそは大学の生命的原理である。問題はあくまでも将来の広い展望のもとに、民主的に知性的に討議されねばならぬ。如何に高遠なる世界観も価値観も、アンティテーゼによって練えられぬものは、いみじくも丸山真男が指摘しているように、イメージの動脈硬化と自己累積を流動化するだけの潜在的エネルギーをもたず、日本固有のセクショナリズムに類落し、前近代的な構造的諸関係をかえつて強化するという悲劇を演じるにすぎない。このことが如何に学園の進歩と改革を阻害しているかということは、われわれが

すでに経験から学んだところであった。

かかる不毛な自閉性に対してわれわれは、否認の論理を貫かねばならぬ。そして批判をより鋭することによって現状を越えていかねばならぬ。ここにおいては、相互の世界観の相異は、内に創造的フアクターを含んだ対立として、ダイアローグの推進力として動的・弁証法にとらえられねばならぬ。かかる実践的倫理は、「発展に対応して自己の批判視点を移動させていく」といったダイナミズム（「現代日本の革新思想」、河出書房参照）と、「複数の目標やコースを前提として不断に状況認識しながら、自分でそのなかから選択する」（同上参照）主体的能力を要請するものである。それは言葉の深い意味においてリアリストリックであると同時に芸術的なアンガージュマ

ンであるといえるかもしれない。

ともかく現在ほど真に創造的な論争を必要とする時代はないのである。本文はいわば論争のすすめとして草されたものであり、また、かまよな意図の下に、文学の研究にたずさわるものによって書かれた論評なのである。

二

各々に全体の共同の領域にわたって政治的に経済的に進歩したがために、問題の中心は世界を変革することにあること、当然の理とみなされるようになってしまった。だから、世界を解釈することは余計なことになってしまった。以来フイエールバッハに対するマルクスのテーゼをうのみにすることがむづかしくなった。アドルノは折にふれて以上のような意地悪い皮肉な感想をもらしていた。アドルノの言葉は、マルクス主義の再検討の必要性を仄めかすものとして、現時点においてアクチュアルな意味をもつものといえよう。というのも、学園紛争を中心に現在の革新運動全般の思想の動態を一瞥してみると、問題の中心の一つはマルクス主義が新しい光の下に再構成されてきたこととしぼられてくるからである。これは二度にわたる安邦反闘争を体験してきたわれわれにとって、「人生における出合い」としての危機の体験ともいふべきものであった。ここにおいて

われわれは、マルクス主義そのものを原
点にもどって再検討せねばならなくなっ
たのではなからうか。というのも、われ
われは如何なる世界観に立つにせよ、真
に知識人という名に値する存在となるた
めには、マルクス主義との対決をさけて
通るわけにはいかなかったからであ
る。

今さら言及する必要もないであろう
が、まず第一に反省されるべき問題は、
公式主義的・教条主義的マルクス主義の
思想的貧血性と現状追隨性である。本学
の教授である谷沢永一氏が藤本進治の紹
介に即して強調しておられるように、問
題のすべては「躍動する多様な状況の各
局面に密着したかたちで」思想をより
「具体的に」展開すべきところに帰着す
るのである。

ここにおいてまず第一に問われねばな
らぬのは、マルクスとヘーゲルの思想と
の間の有機的相互関係である。ヘーゲル
によれば、普遍性がつねに特殊性を生み
だすことによって、概念はつねに運動し
ながら自己展開する。ここで藤本進治
の言葉を借用するならば、「対象の真
理とはその活動である。」普遍的真理を
このようにつねに「生成」(Werden)
として全体化作用のもとに綜合的に把握
することこそ、ヘーゲルの弁証法の魂で
あったといわねばならぬ。マルクスはこ
の弁証法の魂を骨髄的深所において理解

したのであった。かかる意味の関連性
において想起されるべきは、次のニイチェ
の定義である。すなわち、「ドイツ人は
偉大なヘーゲリアンである。」ニイチェ
は天才的な詩的直観力をもって、ドイツ
精神の根底を貫く生命的なるものを剔抉
したのであったが、かような意味におい
てマルクスもまた、代表的ドイツ精神の
体現者なのであった。このことは実はも
っとも注目されるべき問題の一つなので
あるが。

ここでヨーロッパの現代化の問題に目
を転じるならば、ドイツにおいては他の
西欧諸国家の場合とは異り、ブルジョワ
革命は不徹底に終わり近代国家を形成す
るに到らず、中世の封建的・反動的諸要
素を多く残していた。若いマルクスが極
論しているように「ドイツは旧政治の完
政であり」、ドイツは「歴史の水準以下
にあった。」ここにおいてマルクスはヘ
ーゲルの弁証法を精神の豊饒な内容とし
て内より理解しながらも、いな、理解し
たがために、その国家哲学の歴史的境界
を透視したのであった。ここでレヴィエ
トにしたがうならば、「ヘーゲルが当時
存在した国家を政治哲学の内容と考えた
とき、自分の概念の内容を示すのに没頭
して、それを批判によって修正しようと
も、それを修正によって創造しようとも
しなかった。それはヘーゲルの理解の仕
方の実際の傾向そのもの、妥協の傾向か

ら説明できる。……ヘーゲルの妥協は
突然変じてマルクス・社会的憤激、キル
ケゴールの宗教的憤激となった。」(傍
点筆者)ドイツの政治的現状の实体、市
民社会における階級的疎外の問題、これ
らはすべてヘーゲル哲学の括弧外に属す
ることがらであった。かくして、ヘーゲ
ル哲学はいわば頭脳のなかでの革命に止
まり、現実との真の接衝を失ない、後進
国ドイツを解放する力量とはなりえな
かつたのであるが、マルクス主義の問題の
根本の出発点はまさにここにあった。

これを歴史的であると同時に宿命的な点
において、もっともドイツ的な問題であ
ったといわねばならぬ。

当時のこのようなドイツの場の状況
は、いわば底なしの深淵であった。それ
はつねに、いつ存在の地獄に落ちむか
わからなかった。フランス・イギリス的な
意味での政治的解放、ブルジョワ革命
は、問題の真の解決には到底なりえな
かつた。マルクスの天才は、このドイツ
の局限状況を明し未来への生成の局限
可能性の場として創造的に把握した点に
あった。逆説的に表現するならば、せ
ばつまったぎりぎりの場としてのドイツ
の特殊性は同時に「特殊」という具体性
によって、かえって根底的な革命の可能
性を内にはらんでいたのであった。か
かる普遍的解放は、つねに、無であるが
すべであるかの二者択一性、首尾一貫性

を前提するという点において、徹底的
であると同時に天才的なものでなければ
ならなかった。そしてここにおいて何処に
革命の敵を定着させ、何処に革命の力量
を求めるといふ観点に立つて、限界状
況的に問題設定をし、ラディカルな思考
弁証法的に展開させていったところに
マルクスの実践に関する非凡な構想力が
あったといえよう。マルクスにしたが
うならば、革命の真の主体は、市民社会か
ら疎外され鉄の鎖よりはかに失なうべき
何もものもたぬ、人倫の完全な喪失体と
してのプロレタリア階級であった。だか
らこそ若きマルクスは次のように大胆に
言いきったのであった。「ドイツにお
いては、あらゆる種類の隷屬をたちきり
でなければ、如何なる隷屬をもたちきり
えない。根本的なドイツは、根本的に革
命するのだければ、革命できない。ド
イツ人の解放は人間の解放である。この
解放の頭脳は哲学であつて、心臓はプロ
レタリアートである。哲学はプロレタリ
アートの止揚なきしては実現されず、プ
ロレタリアは哲学の実現なくしては
自らを解放しえない。」マルクス主義は
以上の叙述より理解されるように、混沌
として救いのない現実の根底に浸透する
精神の働きでもって人類の普遍的解放を
目指す、ラディカリズムとしての哲学的
人間学であった。これはマルクス主義の
黙示録的側面といえるかもしれない。

マルクスによれば、客観的現実において概念に還元できぬ、もつとも具体的なものである「疎外」という人間実存の特殊性は、弁証法的全体化作用を通じて人間性を回復するための媒介項であった。サルトルはここに、マルクス主義と実存主義とが結びつく窮極の必然性を見きわめたのであった。(サルトル「方法の問題」(人文書院)、竹内芳郎「サルトルとマルクス主義」(紀伊国屋書店 参照) 疎外を通じて真にアクチュアルな歴史の創造に参加する道に生きるマルクス主義者にとつても、もつとも本質的契機は「生成を掌握して未来を建設しようとするプロメティスの企圖」(ガロディ)であった。かような意味においてガロディがゴリキイの言葉を援用して例証しているように、「共產主義者にとつて美学こそ未来の倫理学であった。」マルクス主義者はここにおいて、目にも見えぬ衝動にしたがって自己自身を超越しようとする、魂の飛翔性をもたねばならぬ。そして魂の飛翔が真に精神現実の力量となるためには、藤本進治の表現をここで借用するならば、マルクス主義者は「自己の内部に答えるものと問うものとを分化させて、みずから問いみずから答えるものとならねばならぬ。」筆者はここにも、マルクス主義と実存主義とを結びつける紐帯をみるのであるが、それはさておき、マルクス主義が現在もつとも必

要とするものは、歴史的創意と主体的人間性なのである。かような意味において「審美的なるもの」は、人間学としてのマルクス主義にとつて不可欠の構成要素であるといわねばならぬ。

三

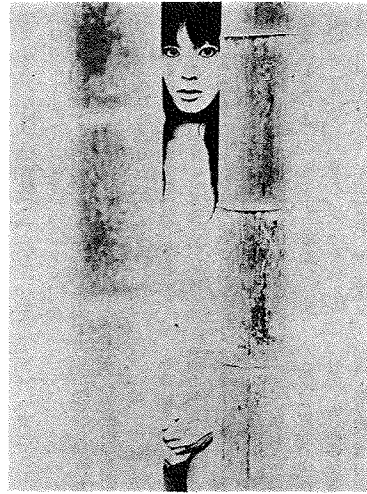
しかし、マルクス主義はあまりにも哲學的・審美主義的になり、現実との生きた接触を失なうならば、主観的なフアナティズムかシニカルなニヒリズム、あるいは根無し草的なプロブル急進主義がドニキ・ホーテ的なプロブルキズムに陥入らざるをえない。いずれにせよ、これらはすべて、いたずらに権力を挑発する小兒病的ラディカリズムにしかすぎない。い

の往復運動を行なうこと」(現代日本の革命思想「参照」)によって、前章で述べてきたような問題との対決を過程として一度はくぐりぬけてこなければならぬ。だから科学としてのマルクス主義はかかる齟齬と深淵をくぐりぬけてくるとき、真にアクチュアルな思想となるであろう。これこそマルクス主義の真の主体的・行動的前提条件なのである。

病的ラディカリズムにしかすぎない。いみじくもレーニンが縷説したようにマルクス主義は、変革の過程において全体の事情がどれほど変化するかという認識を實踐を通じて体得することによって、流動する多様な現実の諸関係につねに密着したものでなければならぬ。「ドイツのイデオロギー」(「経済学哲学草稿」以後のマルクスの著作を読めば一目瞭然となるのであるが、マルクス主義はかような意味において同時に、現実の下部構造としての経済的・物質的諸関係に深く浸透して客観的科学でなければならぬ。そしてマルクス主義が真に科学の名に備するものとなるためには、「現在の現実という媒介項を通じてヴィジョンと経験と

以上述べてきたことを図式的に表現するならば、「有効なる実践」を基軸にして「哲學的・審美主義的な次元」と「物質的・経済学的次元」の双方の次元が立体的に交錯するところに、客観的科学としてのマルクス主義を位置づけることができる。マルクス主義は、両次元の算数的総和以上の意味をもった生きた全体像となるとき、人間学のアクチュアルなカノンとなるのである。筆者はこれをマルクス主義の生命の力学と呼びたいのである。以上のような反省に基いて、ひとりマルクス主義者のみならず、民主主義者はすべて現実との生きた接触をつねに保つことによつて、真理を瞬間毎に新たに創造せねばならない。マルクス主義的創造性は、幾多の迂路曲折を経たものでなければならぬ。というのも、ここでブレヒトが弁証法的に透視したところにしたがうならば、二点を結ぶ最短距離は直線だけではないからである。

最後に總括的に要約するならば、マルクス主義に関して現在、根底的に問われるべき人間學的諸契機は、「歴史的創意」であり「主体的・行動的構成要素」である。かかる大いなる意味の連関において筆者は、前者の問題に関しては、ガロディ「二十世紀のマルクス主義」(紀伊国屋書店)、後者の問題に関しては、コルシュ「マルクス」(未來社)を、その他マルクス主義に関する創意にみちた文献として藤本進治「マルクス主義と現代」(せりか書房)を、すべてひとつの問題提起の書として、ともすれば倦怠に陥入りがちなわれわれの精神に対する刺激剤として学生諸君に一読をおすすめしたいのである。そして、これはもうすしばかり古くなってしまったためにアクチュアリティが多少稀薄になった感をぬぐいたいのであるが、六十年の安保闘争以後の現代日本の民主主義の問題に関する総括的検討の書として、「現代日本の革新思想」(河出書房)を推薦して、この以上述べてきたことはすべて、文学の研究の末席をけがしている一教員が行なつた、論争のためのささやかな問題提起にすぎない。問題はつねに今後に残されているのだ。われわれにとつてもつとも要求されているものは、創造的な構想力であり、批判として流鏝する精神の自由ではなからうか。とにかく、われわれはつねに豊かであると同時に鋭いヴィジョンをもたねばならない。



中国に入る道を示唆

丸山松幸著 「五・四運動」

はやしはじめ

明治維新から一〇〇年あまり、五・四運動から五一年目の今、日米共同声明―沖繩七二年返還―繊維問題。と、絶えず、日本と中国との関係を、日本の膨張主義の内と外の分裂の中で際いでいたにすぎないことの克服を要請している。それは、いうならば、あらたなアジア主義とでも呼ぶものだろうか。それは、膨張する日本から見た、中国、では決してない筈である。その、中国人民、を視ることの試みが、なされることはそういう私たちの、新しいアジア論、形成の第一

段階だろうと思われる。

丸山氏の「五・四運動」の問題意識は次のようである。

「私が本書で追求するのは、さきにも言ったように、五・四運動を推進した知識人の意識である。第一次大戦によって欧米帝国主義列強が一時的に後退し、中国の資本主義経済が飛躍的に発展したという経済的要因、ロシア革命を中心とする世界プロレタリア革命という国際的要因などの分析は、私の手に余ることであるので、知識人たちの意識に投影した範

囲でしか触れない。ただ、彼らの意識形成に直接影響を及ぼした辛亥革命以後の政治的諸事件については、比較的詳しく記述することになろう。辛亥革命から袁世凱の独裁、日本の侵略、軍閥支配の中で、彼らは何を考え、何を欲していたか、一人の思想家の思想ではなく、集団としての知識人の精神状況を外から把握するためにはそれが必要であるし、手軽に利用できる類書があまりないからである」。(まえがき13頁)

すなわち、五・四運動は中国における

民衆運動の典型であり、「志士仁人」の革命家・論客・軍閥の競いではなく、また決して一探の暴動でもなく、民衆が、△下からV起した反権力・権力闘争として存在し、そうした意味において、まさしく、中国革命の、真の主体、を孕んだ運動であった。この運動を自らがどう対象・認識するにかよって、中国革命の主体が決したのである。そして、五・四運動の歴史的意義については、毛沢東が『新民主主義論』に述べているが著者は「五・四運動」を、現在のなわれ

われの地点から対象化しようとする。そして、「運動を推進した知識人たちの意識」を対象化するのによつて徹底した民衆運動の「おもいっきり大衆をたちあがらせること」によつて、実権派、あるいは、その、代行主義、を諷刺した。「文化大革命」との普遍性を看ようとする。そして、それは、68/69日本における全国の学園闘争、仏パリ五月、米SNCC-BPP、SDP、S、伊トリノ、全共闘西独 SDS 等々にまで普遍化される問題があることである。

しかしながら「それぞれの運動を発動し推進した主体である青年たちの意識に注目するならば、そこには深い共通性が存在しているように思われる。彼らはいずれも古い権威と正統性に真正面から挑戦する。明確なプログラムも戦略もまじりや計算もなく、抑圧に対してはほとんど本能的に否定を宣言するのである。したがつて彼等の行動はアナキーな相様をとらざるを得ない。だが、既存の存在を破壊しようとするとき、このようなアナキー状態のなかったことがあつたらうか。それだけでは変革を実現できないにせよ、それには変革のエネルギーを生みだせぬ。私は五・四運動の中から取り出せようとしたのは、そのような、彼ら青年の意識の形成過程とその発言の態様である」（まえがき6頁）とされる

これでは著書が「辛亥革命以後の政治

的諸事件にひいては比較的詳しく記述」することの意味が、あるいは、また記述の仕方においても、その内容が後述するのではないだろうか。

「辛亥革命以後の政治的諸事件について比較的詳しく」述べるのが、単に一九一九年のアナキー的爆発の蓄積過程であるとするならば、単に、ほぼ八年間もの間が「ウラミ・ツラミ」の蓄積であるとするならば、それは単に反対建、反日本・反帝国・反：でしかないのではないだろうか。アナキーなまでの爆発的現場であるということで、歴史的・世界的に普遍化することはどうかと思うのだ。それは、また、「政客の煽動」であるとか「英米の使喚」ということの現象を強調することはナンセンスであるが、これとまた違った意味で現象的である。

「若い」ということは、単に、エネルギーッシュであるということでは決してない。それは、様々な領域での蓄積のいわば、その頂きから出発、展開できるということなのである。それは、否定的にも肯定的にもである。公認の指導部の、あるいは政客の裏切りとは前者であるし、新聞「蘇報」、雑誌「独立週報」、蔡元培章炳麟、鄭容等の活動、そして「甲寅」章士釗、陳独秀、李大剣、吳虞、胡適、高一涵、易白沙等の活動、そして、陳独秀の「青年雜誌」（「新青年」）、「自我の確立」をうたった近代主義運動・

新文化運動・啓蒙的な運動。そして、文学の領域での魯迅の活動、最後に「人民の力を『民衆』としてとらえ、民衆こそ歴史創造の主体であるという結論」に至る李大剣の思想に至る過程こそが、後者である。

もちろん著者も、五・四運動のより統一した像を構築しようとする程、中国人民のその主体の形成の問題に触れなければならなくなっているし、また叙述にもそう見える。

しかも、私が懸念するのは、あまりに民衆運動Ⅱエネルギーでありすぎるのだ。そして、またそれが叙述ではⅡアナキー思想なのだ。

どうしてあれだけの量のあれだけの持続した闘いがおこなわれ、そして、その後、中国革命の端緒となったのだろうか、そして、その思想的表現は、決して、胡適―陳独秀の啓蒙主義、自我確立、近代主義、インテリゲンチヤの運動ではなく、一方では、民衆の意識の奥底深く潜んでいた魯迅であるし、そしてまた、パリ帰りのアメリカ帰りの輸入アナキストではなく、「民衆が何を求めるか」を問い続けた李大剣であると思われるのだ。

そして、そのことが、また、大衆的実力闘争をその先頭で任じた人たちが、その後二一年に共産党を結成していく過程、すなわち、その大衆的な反帝愛國闘

争が、大きく質を変えていく過程が一方であきらかになり得ないところなのではないのだろうか。大衆の秘められた巨大なエネルギーを、英雄的であり偉大である。しかし、それを組織し、持続することは、もつと偉大な作業なのだ。果して、後に紅軍―正規軍を組織し、新しい社会を組織していく過程へ向けてのその萌芽は、その主体はどうあったのだろうか。

私たちは「中国」についてあまりに知らない。判らない。それは、中国は絶えず、常識、を壊して行くからであり、そうしたことは世界共産主義運動が、中国革命、によつて、どれだけの硬化を防ぎ、どれだけの教訓を受けたのだろうか。

本書について、全く、中国、について無知である私は、事実関係のあれやこれやについては言うことは全くできない。ただ、しかし、五・四運動が爆発的となったとしても、それがアナキー的現象であつたとしても、本書から感ずる限り、そうではないように思うのである。とりわけ、李大剣にしてそう思われる。西欧帰りの文化人と明確な対称(的)をもつように思われるのだ。私は、著者が五・四運動の歴史的、世界的普遍性を追求されるあまり、ステューデント・パワー・アナキーといった一般的なところ

に帰着させられないほうがいいと思う。そうしない方が、より、その深部で、「人民の思想を自らの思想に繰り込む」と、「大衆がおもいつき立ちあがること」と「闘いが持続すること」の問題がある

きらかになると思うのだ。しかしながら、本書が、「五・四運動」そのものを、捉えかえすなから、五・四運動像を構築しようとした志向は、私たちにまた違う方向から、中

国に入る。道を示されたようである。ともかくにも、実際に世界は、支配と被支配という構造なのだから。――「五・四運動」(紀伊国屋新書)――丸山松幸(関西大学文学部助教)

中国近代史関係出版文献目録

福島正夫「中国の人民民主政権」東大出版会

「人民公社の研究」御茶の水書房

中国研究所編「現代中国思想論争」未來社

黒田寛一「現代中国の神話」こぶし書房

「毛沢東神話の破綻」

新島淳良、野村浩一「現代中国入門」勁草書房

岩村三千夫、野原四郎「中国現代史」岩波新書

岩村三千夫「中国現代史入門」至誠堂新書

池田 誠「中国現代政治史」法律文化社

西 順蔵「中国思想論集」筑摩書房

竹内 実「中国の思想―伝統と現代―」NHKブックス

島田虔次「中国革命の先駆者たち」筑摩書房

竹内好他編「講座中国」筑摩書房

I、革命と伝統 II、旧体制の中国 III、革命の展開 IV、これからの中国 V、日本と中国

別巻中国案内

リンドレー「太平天国」平凡社 東洋文庫

G・N・スタイガー「義和団」

柴五郎達、服部宇之吉著「北京籠城記」平凡社 東洋文庫

島田、小野「辛亥革命の思想」筑摩書房

竹内 好「現代中国論」筑摩書房

「中国を知るために」(第1、第2集)勁草書房

野原四郎「アジアの歴史と思想」弘文堂

今堀誠二「中国近代史研究序説」勁草書房

山口 一郎「現代中国思想史」勁草書房

中国研究所編「現代中国の基本問題」勁草書房

高田 淳「中国の近代と儒教」紀伊国屋新書

蔵居良造「近代中国史」紀伊国屋新書

小野川秀美「清末政治思想研究」みすず書房

竹内 実「中国―同時代の知識人」合同出版

山田要児「中国革命」筑摩書房

「未来への問い」

ボーヴェォール「中国の発見」紀伊国屋書店

J・M・バートラム「中国革命の転機―安西事件の記録」未來社

栄 孟源「現代中国史」大月書店

福島正夫「人民公社」勁草書房

新島淳良「毛沢東の思想」勁草書房

「毛沢東の哲学」

「新しき革命」

米沢秀夫「中国経済論」

川添登、犬丸義一「中国の文化大革命」青木書店

J・ロビンソン「未完の文化大革命―中国の実験」東洋経済

菅沼正久「中国文化大革命―その事実と論理―」三一新書

「中国の社会主義」御茶の水書房

トニー・クリフ「現代中国革命論」風媒社

中西 功「中国革命と毛沢東思想」青木書店

安藤彦太郎「中国通信」大

安藤彦太郎「文化大革命の研究」亜紀書房

菅沼、新島、西、野原編

「講座現代中国」太修館

I、現代世界と中国 II、中国革命、III文化大革命

中島嶺雄「中国文化大革命―その資料と分析」弘文堂

新民主義経済研究所編「中国革命の理論」(上、下)三一書房

郭拓、呉昉、廖泳沙「燕山夜話付三家村札記」毎日新聞

武田泰淳、竹内実「毛沢東その詩と人生」文芸春秋

各務寮一「毛沢東の政治―中国社会主义の現実―」三一新書

国際関係研究所「毛沢東主義の幻想と現実」三一新書

菅沼正久「連統革命と毛沢東思想」楊逸舟「台湾と蔣介石」

吉田実「現代の中国」中央公論新書

野沢豊「孫文と中国革命」岩波新書

竹内実「日本人にとっての中国像」春秋社

玉嶋信義「中国の日本観」弘文堂

天野元之助編「現代中国経済論」ミネル

ヴァ書房

トロッキ―「中国革命論」現代思潮社

I・ドイッチャー「毛沢東主義」新汐社

■わたしの研究ノート

昭和四十二年十月一に岐阜県海津郡南濃町の丘陵上で水道貯水槽の工事中一基の古墳が検出され調査を依頼され

ハロルドR・アイザックス「中国革命の悲劇」(上、下)至誠堂

三浦つとむ「毛沢東思想の承因―マルクス主義の後退と墮落―」至誠堂新書

エドガー・スノー「中国の赤い星」

「中国もう一つの世界」(上、下)筑摩書房

小島祐馬「中国の革命思想」

尾坂徳司「中国新文学運動史」法政大出版局

鈴木、高木、前野「中国文化叢書」大修館

今井与志雄「魯迅と伝統」勁草書房

佐々木基一、竹内実「魯迅と現代」

増田 渉「中国文学史研究」岩波書店

鈴江 言一「孫文伝」

橋山久雄「魯迅―革命を生きたる思想」三省堂新書

た。そこで学生諸君と急ぎ現地に赴き発掘調査に必要な手続、準備を行い、十二月九日より調査実施することになった。

調査をすすめているうちに、この古墳は標高九米の丘陵上に築造された全長約六〇米の前方後円墳であったことが判明し、後円部に主軸にそった竪穴式石室が遺存することが確認された。

この竪穴式石室は扁平な板状の自然石を小口積みにした構造で、その内部

書評編集部員募集

書評は「思想運動」を追求、学術文化活動の交流媒介の場としての意義を持った雑誌です。あなたも入書評Vの編集に参加してみませんか。

(詳しいことは生協組織部まで)

電話内線七七六)

には木棺が納められていた痕跡も認められた。

そして副葬品として収められた三面の鏡が出土した。この三面のうち最初に石室の中央のやや高い位置で検出した鏡は三角縁神獸鏡であり、次に棺と石室の側石の間に立てかけたような状態が出土したのは面文帯神獸鏡であった。最後に石室の北西隅に置かれていたような状態にあったのは三角縁神獸鏡であった。その他鉄鏡や鉄斧、刀剣

なども検出したが、今ここに取り上げようとするのは北西隅に置いてあった一面の鏡である。

この鏡は詳しくいえば唐草文帯天王日月二神二獸鏡と呼ぶ形式である。外縁が三角縁となり、外区の銘帯に唐草文を配し、そのなかに「天」「王」「日」「月」の四字を鑄している。そして内区は上下に男女の神像がありその中間に二射獸形が置かれている。この神像と獸形の間には換文乳座のある

四乳が配され、中央には鈕がある。鏡の直径は二一・七釐で鍔上りは精巧な漢式鏡である。

さてこの鏡が出土したことによどのような意義があるのだろうか。先ず第一点はこの形式の鏡が出土したということ、第二点は岐阜県という地点で出土したこと、第三は他に鏡が二面あるということなどを挙げる事ができる。

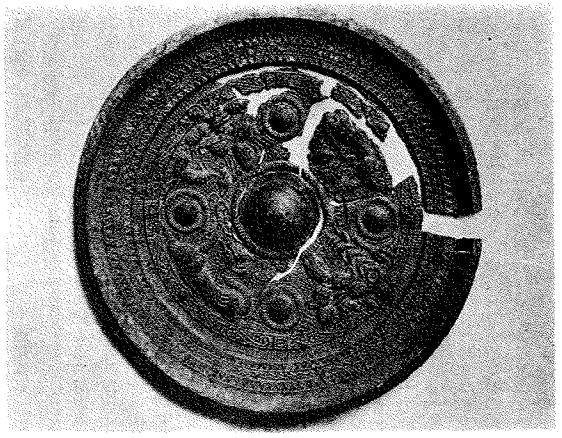
第一の問題は元來この形式の鏡は大陸製の鏡で輸入品であるという考え方と、我が国で製作した所謂仿製鏡であるとする考え方がある。そしてこの鏡が輸入品すなわち舶載鏡であるとすると、それは邪馬台国の卑弥呼の時に伝來した。そして一つの形式の鏡が五面を単位としたのであつて、五面以上は出土しない。それは同范鏡(同じ鋳型で製作した鏡)であり、この種類の鏡の分布する状態をみると邪馬台国はどこにあつたかが決定される。そしてその結果かつ「邪馬台国は畿内である」という結論に達する問題の鏡であつた。

そこで私たちの調査によつて出土した鏡を詳細に調べてみた結果、これと同じ鏡がすべて神戸で一面、京都で三面、岐阜で一面とすでに五面が出土している。加えてこの鏡で六面目になる。さらに東京国立博物館の收藏品を

鏡の一面

Ⅲ 挑むに謎の古代

教善干網



出土を契機として同范・同型鏡論が一層深められるものと確信する」

近くこの問題点を再び取り上げて、論巧することにしていく。

次に畿内と美濃という地域を結ぶ政治的、文化史的問題、文化の波及、伝播の問題、さらに第三の他の一面の三角縁神獸鏡が奈良県佐田宝塚古墳出土の鏡と同じ型式の鏡である点など、鏡をめぐる日本古代史の謎に新しい出発

(文学部助教授)

調べたところ、奈良県から出土した鏡の破片に同じものがもう一面ふくまれていたことが明らかとなつた。結局合計七面になつたといふことである。これでこの鏡をめぐる邪馬台国の問題は解決したのではなく、むしろ将来なお基本的な問題から検討する必要があるのであつた。

私はこの調査報告書(関西大学考古

学研究年報第二集)次のように書いておいた。

「従來論議されてきた同范鏡・同型鏡について両者の論拠にかなり不備な点があることを知つた。全く同じというものはあり得ず、極めて細い部分について型の修正が行われている。しかし原型はあくまでも一つの型から出発していることは事実である。この鏡の

「思考の原理」の確立を

人間疎外恐慌の展開期

力 石 定 一 (法政大教授)

人間的な制御に失敗

一九三〇年代に世界大不況が訪ずれて過剰生産の恐慌が勃発した。これは、生産を無秩序にやり過ぎた結果、生産と消費のアンバランスからこういう不況が爆発したわけです。けれども、そういう恐慌の中から、有効需要をうまく操作して生産力と消費との間のバランスをとっていく検閲的な管理が発達して戦後は高い経済成長が続くようになり、その必要も少なくなり、そして所得水準がどんどん上がっていくという型の成長を続けている。けれども、これが暫らく続いてきて、次の新しい問題があらわれてきた。

それが、一九六〇年代の下半期ごろから起こった「人間疎外恐慌」であるというふうに私は名づけている。けれども、恐慌とは、所得はどんどん伸びていくけれども、ほかの人間らしい生活というのが破壊されてくる、環境破壊を中心とした危機であろうと思う。それはどういう型で起こってくるかという、一連のプロセスにおいて起こっている。例えば、戦後は、ものすごい「インダストリアルイゼーション」が行なわれた。「インダストリアライゼーション」をうまく人間的に制御することに失敗した。これ

が産業公害の爆発だと思う。

第二番目には、戦後はものすごく「アーバライゼーション」が進んだこと。即ち「都市化」が進んだことである。これがうまく人間的に制御されなかったために起こったのが「都市公害」であり、そして過疎地域の「都市の崩壊」「ゴーストタウンの」連続というふうな型で過密過疎の弊害がひどくなってくるということになった。

第三番目には「モータリゼーション」のプロセスが非常に進み、うまく人間的に制御されなかったこと。そのことが、いまの「交通公害」の結果と排気ガスと大気汚染というふうな大きな弊害を呼び起こしている。

第四番目には「情報化」が非常に進んだこと。たとえば、「コンピュータリゼーション」と「コンピュータリゼーション」の制御がうまく進んでいない、アメリカなんかでもうまく進んでいない。その結果、コンピュータに振り回され、人間の意思決定をコンピュータに委ねるという、ひずみ、が起こってくるということになる。あるいは「情報化」の一つとして大量消費材が大規模な広告宣伝を通じて民衆に売り込まれていく。そこに大規模な情報が行なわれるわけであり、今度ではテレビ産業のようなものがある。けれども、広告の氾濫を通じて、すごい過当競争をやって、人間を歪められた情報の中に埋没させていくという



(北富士演習場の開(入))

型の「情報公害」が発展している。これまた一つの大きな危機である。

さらに「大学革命」が非常に起こって、進学率が非常に高くなったこと。ところが、この大学の研究と教育の内容がうまく人間の制御されていないために大きな教育の危機が発展しているということが見られる。それから、個人的な消費材が、非常に「消費社会」という型で進んでくる。それが、非常に人間を侮辱したような欠陥製品やちよとした見えて

恐慌の御制の行動

つけ加えると、例えば、レジャーが非常に進んだ、このレジャーの中で観光産業が発展して、これが、自然破壊をもつて起こる呼び起こす型は、人間が、人間と自然とのバランスが乱れてくるという。「生態学的な均衡」が乱れてくる。この型の危機体というものが爆発してくる。その危機の爆発が、人間にどういふふうな現象を呼び起こしてきたか。

例えば、経済恐慌は、全部門震撼の型で、過剰生産恐慌は爆発した。けれども、これと同じような型で、いま一連のプロセスが、全部門震撼の姿をもって危機に追い込まれている。その中で、戦前の過剰生産恐慌ではこの失業者が氾濫する、飢饉が蔓延する型で「人間疎外」が

くればそぞろのような散乱な気分を呼び起こすような、個人的消費材が氾濫している。一方で、ものすごく大きい大きな社会的な消費材の結託が起こって、それが「ソオシャルアンバランス」、それが非常に発展している。この「ソオシャルアンバランス」を制御することにも人間は失敗したわけです。このように、高い経済成長にもかかわらず、さまざまな戦後のプロセスが、人間の制御されないで環境破壊が爆発している。

広がっていった。けれども、戦後の過程では「交通戦争」による交通事故死者、死傷者数がものすごく大きくなってきている。例えば、日本では、いまや来年、再来年ぐらいには百五十万人の死傷者が交通事故で死んだり、負傷したりすることになる。これは、第二次世界大戦中の日本軍の戦死傷者数に匹敵する危機、或いはこの技術社会のこの「人間疎外」が非常にひどくなっていくと、拒絶反応が人間の中で非常に広がってくる。こんないやらしい社会はいやだという人たちが、どんどんあはれられてきて、「ヒッピー化」がものすごく進む。青年の「ヒッピー化」が大規模に進んでいく。それから、青年たちが、この民主社会の矛盾か

ら逃避しようとして麻薬が横行するようになってきている。麻薬取引数がアメリカの青年の三割に達する型で拡大している。こういった麻薬が発展し、交通事故が非常に増えてきて、パタパタと人が倒れるようになってくる。人命尊重感がだんだん増してくる。そこへもってきて、「テレビ人間」とか「単人間」という型の人間のスタイルが、形が、どんどん拡大してくると、それと合流して、人間の盲目的な暴力の行使、あるいは暴力犯罪の増大となつてあらわれる。これは、犯罪件数が、日本でも昭和三十年代の初めには、生産の発展と豊かさの増大とともに減っていった。けれども、三十年代の半ばごろから、また逆に激増し始めて、犯罪件数がどんどん増えてきている。アメリカでは、これが極端に達している。ワシントンやニューヨークではもはや危なくて、夜歩けぬ状態になってしまふ、という型での犯罪件数の増大である。これは戦前の経済恐慌の大量の失業の発生と同じような位置を占めるのではないかと思う。

そういう「クライシスの危機」の爆発が、いまの時点である。この時点において、人間が何をしなければならぬか、というところが問題になっている。経済恐慌の時期には御存じのように、アメリカでは、「ニュー・ディール」実験が行なわれ、ケインズ革命によって有効需要操

作政策で、経済恐慌に対する制御の行動が起こる。それから、北欧諸国では、特にスウェーデンを中心としてケインズ革命が行なわれて、ここでこのケインズ主義は「福祉国家型」の経済発展の方向に進んでいく。日本とドイツでは、この経済恐慌の制御に保守、革新ともに失敗して、そこからナチスや軍国主義が発展してくる時代を迎える。

そういう危機の時代が一九六〇年代の終わりから始まった。ちょうどいま一九七〇年は、二十九年恐慌が突発して二年たった一九三〇年代の半ばぐらいの時点を進みつつあるんではなからうかと思ふ。いまの危機の中から、どのようにして環境破壊を制御し、「人間疎外」から脱出するか、という新しい「ソオシャルプランニング」が模索しなければならぬ。もし、これに成功するならば、これは新しい地平をわれわれの社会の前途に開いていくことができる。これに失敗するならば、これから何が出てくるか、わからないという恐ろしい現象もまた前途に開いている。無秩序になり、ニヒリスチックになった人間が何をかすか、わからないという局面が先進工業国全般を通じて起こっている。世界的な規模における「人間疎外恐慌の展開期」であるといふことができる。

われわれは、そういう新しい「ソオシャルプランニング」或いは「ヒューマニス

「テックプランニング」を必要とする時代に直面しつつある。その場合のプランニングの諸方法についてはここでは述べません。その前に、そのプランニングをやっていく上において、われわれの「思考の原理」を確立することが必要であると思ふ。いくつかの「人間疎外」を引き起こしている「思考の原理」を反省してみる必要があるかと思う。これは、エーリッヒ・フロームが『希望の革命』の中でいくつかあげていることは、非常に参考になる。

例えば、第一に、われわれは量を中心としたものごとの考え方から、質を重視する時代に移ること。たとえばGNPの中身について、非常に質的な反省を持っているということはある。これは「量の時代」から「質の時代」へということである。

われわれは、しばしば質的なものは計測不可能であるという。それが故に、それが実在しないとか、主観的なものにすぎないというふうな考えがちであった。けれども、そうではなくて、われわれは、質的なものは客観的なものであり、非常に見落してはならない重要なファクターであるということを「思考の原理」から確立する必要がある。

第二番目には、技術的にわれわれは開発可能な範囲が拡大されてきている。生産力は発展し、技術的な貯蓄も進んでき

たのでノウハウが増大した。そうして、開発可能な分野というのはずっと広がってきた。この場合にも、技術的に可能であれば、この可能なるものは必ず実現しなければならぬというふうな考え方をしよう。これは技術の一人歩きであり、例えば核兵器が技術的に可能である、がゆえに核兵器をわれわれは開発しなければいけない。宇宙を探究することが可能であると、技術的に可能である、だから宇宙を探究しなければならぬというふうにして、われわれが何のために技術を研究し、何のために何を開発をするかということについては、冷静な人間的な価値判断を持つことを停止してしまつて、技術的に可能であるものは、やらなければならぬと感じてしまふ。結局、われわれの研究資源をばかばかしい研究課題に投入して大きな社会的なアンバランスを引き起こしてしまつてゐる。

こういう技術至上主義的な観念は、ヒューマニズムの伝統から完全に逸脱している。そういう考え方をまず捨てなければならぬ。「テクノロジーマセメント」と技術再点検の必要性が叫ばれるゆゑである。

第三番目には、そういう技術発展を至上のものと考え、人間がその技術の発展に人間がソーシャルシステムを合わせなくていべきだと考える傾向がある。生産力の発展に、生産関係は適用されなけれ

ばならないという。そこで、無茶苦茶に発展させた技術に、無理やりに人間や社会関係を適用させようとする。人間は動物や植物より適合性が高いので適用力はかなりある。けれども、人間というシステムというものは非常に、そういう弾力性を持っているがゆえに、無茶苦茶にあわせていくとある時点を越えると、ものすごい拒絶反応にぶつかる。その拒絶反応が「人間疎外」という形で爆発してくる。人間のバランスがバランスと、技術や生産力のバランスと、この間にこの均衡をとっていく考え方をしなければいけない。いくらでも人間は弾力的に適應できるんだ、という考え方を捨てなければならぬ。人間のバランス、つまり人間かというものを考えなければいけない時代に入りつつあるということが第三番目の問題だろう。

第四番目の問題は、われわれはしばしば効率というものを考える。このときに「ミクロの効率」と「トータルな効率」との間には大きなアンバランスがあるということを見失いがちである。ミクロ的に効率であることが、そのままトータルシステムにおいてもそのシステムで効率的であれば、トータルシステムで自動的に効率化するかを實現できるという考えを捨てなければいけない。この間に大きなギャップがあつて、しばしばミクロ的

効率がソーシャルな、たいへんな非効率を呼び起こすことがある。この間のアンバランスに目を配って、そうしてトータルシステムにおける人間的な効率ということを考えて行動する精神をつくりあげなければ非常な危険をわれわれは前途に控えていると考える。

第五番目の問題は、人間の受動性という問題である。

消費社会が進み、あるいは「コンピュータリゼーション」が進んでくる。人間は何でもそれにまかせつゝ、消費は、赤ん坊が牛乳ビンから飲むように、与えられるものを次々と消費し、そしてすべての管理や意思決定は自動的にテクノクラフトの手にあずけてしまふ。あるいは、コンピュータの意思決定に従属してしまふという受動性、これが人間の疎外の危機を予告する一つの原因だろうと思う。

こういう「受動性の危機」からわれわれは脱出して能動性、人間の能動性、主体性というものを見失わないようにしなければいけない。そういう能動性を中心として「ソーシャルプランニング」を考えていく人間をつくり出さなければいけない。即ち、あらゆる意思決定を自己のリスクにおいて主体的に選択するような過程が進んでこなければいけない。それにはあらゆる意思決定に対して、主体的に人間が「パर्टィシパيشョン」を行な

編集後記

う、「参加」を行なうということが必要である。その「参加」が失われると制御がむずかしく、制御できなくなつて、「人間疎外恐慌」が起こってくる。ソオシヤルプラニングは、さまざまな意思決定のプロセスに、人間が全面的に「参加」して、これの人間的なバランスを失わ

せないように実に制御していくということの必要性、これが新しい時代には必要になつていく。そういう精神的な原理をまずはっきり確立することが「人間疎外恐慌」から脱出する「ヒューマニスティックプラニング」のための前提であらうと考える。その「ヒューマニスティックプ

ラング」の、個々のプロセス、たとえ「モーターゼーション」に対してはどうしたらいいかとか、「アパーゼーション」に対してはどうしたらいいかというふうな個々の社会科学的な社会工学的な研究は、われわれのそれ自体としてよく続けていかなければならないと考え

る。
若干の問題については、私はすでにして最近の著書において述べているところであります。著書から読んでもらいたいと思います。
(了)

■労働力の商品への転化にみられる資本の内的矛盾の噴出の激烈さは、戦後日本資本主義を成立させてきた財閥解体、農地改革などの経済的条件を自からの手で埋葬、同化させ、その上に成立している「現代」にみられる。だから国家権力は相乗的にその階級的、抑圧的リヴァリアサンの様相を露骨に示滅しざるをえなくなつてきている。これは「帝國主義の再興」が単なる「予想」ではなく、資本主義の自然的法則性として全生活過程にシビヤーに現出する「現実」としてあるということ。そこでは生活の防衛という「古い」

「既成」の概念に経済的闘争そのものの「徹底」が「資本」との対決を余儀なくされる「異質」な闘争として深化されていく。この闘争は、三里塚、忍草、あるいは動労、全軍労の闘争として、資本と賃労働の生産関係を軸に展開されているといえる。「資本が全社会を領導する」ということは、労働力を商品に転化する内的矛盾に依拠した商品賃労働一切を溶解することによって成立しているといふこと。この構造で、「資本」と賃労働の内的矛盾が八生活場に全面的にあらわされて

って、戦争直後以降の、総括と外主義へと集約することも知っている。日本資本主義の内的矛盾は海外への帝國主義的進出として、「既成の」、「危険な」八大東亜共栄圏の路線を行進している。六五年の「韓一圍」台湾七二年沖繩と、日本資本主義の盟主のもと「韓」「台」「沖」の軍事政治プロックの形成への結果を眺し、舞台のせりあがりのごとく。

■「五・四運動」(丸山松幸著)の書評もこの観点から掲載した。
■これまでは知識人の立場から時代について、「現場的」に教授陣にアプローチして貰った。これは生産力の発展に資本の内的矛盾の深化のものにとくりあらわれた戦後民主主義下の「学問共同体」への総括としてでもいえよう。今回は、知識人の行動と場について異なった位相からの「発言」を掲載してみ

た。片桐信彦(美学批評家、篠田正浩(映画監督))。下程息文学部助教授からは、マルクス主義の再検討への諸論文の内容の紹介、方向人への「一試論」として真摯な論究が寄せられた。
■「書評」誌を、文化不毛の地闊大、といわれた階級解体路線の貫徹の状況に対してこの汚名を解体させるものへとつくりあげていく八場として構築していくために、寄稿、論争を望んでいます。